

## エペソ2章1-10節 「神の恵み、愛の源、イエスが全て」

### 1 A 救われる前の姿 1-3

### 2 A 憐れみ豊かな神 4-7

### 3 A すぐれた恵み 8-10

## 本文

カルバリーチャペルのDNAの中に、「神の恵み」があります。それから、「愛が最上のもの」そして、「イエス・キリストが中心」というものがあります。この三つを考えながら、エペソ2章1-10節を読みたいと思います。

1 あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、2 そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。3 私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです——6 キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。7 それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな御恵みを、キリスト・イエスにおいて私たちに賜る慈愛によって明らかにお示しになるためでした。8 あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。9 行いによるものではありません。だれも誇ることのないためです。10 私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。

私が救われたのは大学二年生になる時で、カルバリーチャペルに触れ始めたのが1994年の頃です。カリフォルニアにあるカルバリーチャペル・コスタメサの礼拝またスクール・オブ・ミニストリーを訪問しました。救われたところが違う教会でしたので、カルバリーチャペルは後で来たところ、信仰を学ぶところであるつもりだったのですが、いつの間にか信仰の原点となっていきました。そこで教わっていたことが、自分の信仰のあり方から切っても切り離せない存在になってしまいました。実に、信仰生活の中で20年以上経っています。しかし、どこかでまだ自分はどうか？という疑問はゼロではありませんでした。けれども、はっきりと自分はカルバリーの人間なのだと分かったことがありました。それは、牧者チャック・スミスが天に召された2013年10月のことです。とどめもなく涙が流れました。人が召天して、こんなに涙を流したことはありませんでした。自分がどんなに彼の牧会に頼

っていたのか、自分の信仰が養われていたことを彼がいなくなった時に気づきました。私の信仰生活に、カルバリーの原則が一部になっていたことに気づいたのです。

これから、三つのことについて話したいと思います。パウロがエペソ2章1-10節で話していることで、三つあります。一つは1-3節が「救われる前の姿」です。次に4-7節が「憐れみ豊かな神」です。神が愛であり、神の憐れみによって救われたことです。三つ目は8-10節です。ここは、「すぐれた恵み」について話したいと思います。

### **1 A 救われる前の姿 1-3**

1 あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、2 そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。3 私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。

私たちが神の愛、またその恵みを知るには、初めに自分が罪の中に死んでいた者であって、神の怒りを受けるに値するものであることを知らないといけません。ダイヤモンドの輝きを知るためには、その背景を黒くすればその輝きははっきりするように、罪の中で死んでいたということを知っていないといけません。自分自身が失われていたことを知るのです。

1994年に、カルバリーチャペル・コスタメサの教会で、月曜日の集会に出ました。その時は、グレッグ・ローリーによる伝道集会が毎週月曜日に行なわれていました。そこでどんどん心が暗くなっていきました。グレッグ・ローリーと言えば、ハーベスト（収穫の時代）に書かれているように、すぐれた伝道者であり、私の気持ちを高揚させ、元気にしてくれると思っていましたが、私は暗くなっていったのです。他の周りの人たちはとても喜んでいて、なぜだろうと思いました。後で分かったのです、「自分自身が罪人であることを忘れていた」ということ。そして、「悔い改めなければいけない」ということを忘れていました。

自分は救われている、自分はクリスチャンになって、それで牧師に将来なる訓練を受けているために来ているのだという自負があったのですが、その私が、恵みによって救われたというところに立っていなかったのです。何か、自分の中の可能性を掘り起こしてくれるようなメッセージ、自分に与えられた希望の将来を語ってくれるようなメッセージを求めていました。ところが、神は、「あなたは罪の中で死んでいる。」と言われるのです。救われたというのは、自分を改善することではありませんでした。自分にはどこにも善がない、どうしようもなく墮落している、死んでいるのだということを知るのです。

それで、自分が過去に行なったことで恥ずかしいことを思い出しました。またクリスチャンになってからも犯した罪について思いました。救われる前よりもその後で犯してしまった罪についてのほうが、もっと重くのしかかっています。ところが、私よりもすごいところを通っている人々が、教会に通っていました。まず牧師たちです。なんと、離婚歴がある人、いや一度だけでなく二度以上ある人々がいます。しかし今は、もちろん悔い改めています。そして、スクール・オブ・ミニストリーで証しを聞きました。九割は元麻薬常習者でしょうか、一人は人生の半分以上を牢屋で過ごしたという兄弟もいました。そうです、自分は罪の中で死んでいた、ということを知っている人たちが、そこから私が救われた、昔は死んでいたが、今は、生きているのだ！という証しを持っていたのです。

これが、神の恵みの原点です。自分が罪の中で死んでいたことが、はっきりしているかどうか、であります。これまで日本で奉仕をしてきて、気づいていることはここにあります。それは、「自分が罪の中で死んでいたということを、クリスチャンになっても、実はまだ認めていないのではないか？」という懸念です。これが福音の敵であり、イエス様はパリサイ人や律法学者と激しい論争をされましたが、自己義認こそが福音に敵対するものです。過去にどうであったか、ということ。これを、たとえクリスチャンになっても、明らかにすることを恐れています。救いの証しについて話してもらう時に、二つの傾向を見ます。一つは、「罪を犯していた」ということがはっきりしない証しです。いろんなことを話しているのですが、自分が犯した罪について書いていません。もう一つは、「罪を犯したことを、まだ神から赦されているのか分からない。」というものです。自分が犯した罪については書いていますが、まだ自分を責めているのです。赦されたことを、まだ受け入れていないのではないか？と思われるものがあります。どちらにしても、まだ十字架のところに行っていないのではないか？と思われるのです。そして、クリスチャンになっているのに、「私にはできません。だからこの命令には従えないのです。」というのです。できないって、できないから神が救ってくださったはずで、神の恵みを知るには、このように自分が罪の中で死んでいたことをまず認めないといけません。

日本には、「村八分」という江戸時代から生まれた制度が今も生きています。自分がある基準を達していないと、その共同体から引き離されるという制度です。だから、その基準に達していることを絶えず証明していないといけません。そのために、自分が罪を犯したことはひた隠しにしないとイケない。教会は人が集まる場所ですから、村八分のような文化を自分で持ち込んでしまうことがあります。しかし、ここは恵みの文化です。恵みの文化は、「もうだめになってしまった人間、でも神によって引き上げていただき、救っていただいた人間の集まり」なのです。云わば、刑務所から特赦によって出所できたばかりの人間たちの集まりなのです。そしてまた犯罪に戻らないように、その恵みの中に留まるように励ますところでもあります。

## 2 A 憐れみ豊かな神 4-7

そして4節から6節までを見てください。「4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです——6 キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。」神が私たちを救ってくださったのは、その大きな愛のゆえです。

その愛について話す前に、もっと大事なことを話します。主語が誰になっているか、であります。神がもっぱら行われている働きです。神がキリストにあって行われている働きです。ここに、人の業が何一つ介在していないことが挙げられます。

もう一度、カルバリーチャペル・コスタメサにおける体験をお分かちします。教会の週報には、愛が最も大切であるということが書かれています。キリスト者であることの証しは、アガペの愛があるかどうかであることが書かれています。けれども、私たちが感じたのは「冷たさ」でした。なぜ、人々が冷たく感じるのだろうと思っていました。だんだん分かってきたのは、これです。「あなたではなくて、キリストなのだよ。」という姿勢が、一人一人にあったからです。これまで私が感じていたのは、「人が中心」の愛でありました。自分がほめられて、自分が優しくされて、自分のしていることが認められるような時に、愛を感じていたのです。

しかし、愛は神からのみ来るものです。「1 ヨハネ 4:7-8 愛する者たち。私たちは、互いに愛し合いましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。」神が愛です。ですから、神が愛であるという原点に立っていないならば、そこを源としていなければ、人がどんなに愛であると言っても、それが愛であるかどうかは分からないのです。特に、人の肉の力によるものは、どんなことであっても神はお認めになりません。それは、愛ではありません。主が、アブラハムに対してイサクを全焼のいけにえとして捧げなさい、と言われた時に主は、アブラハムが生んだ初めの子イシュマエルを完全に無視されました。「創世 22:2 あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい。」アブラハムが愛しているのは、ただイサクというひとり子である。したがって、肉によって生んだイシュマエルを息子として数えてもおられないのです。これが、私が「冷たい」と感じた理由でした。自分の努力は何一つとして、神の愛の中では退けられるのです。

したがって、カルバリーチャペルの特徴の中に、「イエス・キリストの中心性」というものがあります。神とイエス・キリストが全てであり、それ以外の要素は横に退けます。私た

ちはカルバリーチャペルにおいてしばしば、「自分に栄光を帰しているのではないですか？」という批判を受けました。初めはとても辛かったです、だんだんその意味していることが分かってきました。まだまだ、自分自身でやっているということがありました。徹底的に、神がしていること、キリストがされていること、そこに愛が流れており、その愛をもって互いに愛するのだということになります。

チャック・スミスの本に、「愛」という題名のものがありますね。そこは三つの部分に分かれていまして、一つは「神の愛」であります。神の愛、神が愛しておられる、ということです。二つ目は「神への愛」であります。それは、心を尽くして、思いを尽くして、知性を尽くして主なる神を愛すること。神を第一にすることです。自分自身が神に献身していなければ、どうして神の愛が自分に流れてくるのでしょうか？そして三つ目は、「自分を通して、隣人に神の愛を流す」ということです。隣人を愛するという事は、もっぱら自分ではなく、神により頼まなければできないことです。神に愛され、そして自分が神を愛して、その愛の関係の中から、隣人を愛します。ですから、そこに自分というものは空となっていき、神の愛が流れ出ていくし、流し出していかなければいけないのです。

私たちのデボーションというのは、もっぱらこの神との愛の關係に費やされていくべきです。神が愛であることを知ります。そして神ではなく、他のものを愛しているその愛を捨てます。そして、他者に対して愛を流していきます。

そしてもう一つ、カルバリーチャペルでは聖書を講解する説教が特徴ですが、聖書講解は教会史の中で説教のやり方の一つでありますから、いろいろな教会で行われています。では、その聖書講解と私たちとはどのように違うのか？という質問があります。ある人が答えました。「神の愛」です。チャック・スミスが聖書を説き明かす時に、彼自身のことも、他の全てのことも忘れてしまいます。ただその聖書の物語だけしか見えなくなり、イエス様だけになります。神の愛、イエス様の愛の中に留まり、その交わりの中にいる時間であるのです。そして、自分の中の罪や欠けがあぶりだされ、それで悔い改めます。そのへりくだった心から、聖霊が喜びと平安を与えてくださいます。

### **3A すぐれた恵み 8-10**

7 それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな御恵みを、キリスト・イエスにおいて私たちに賜る慈愛によって明らかにお示しになるためでした。8 あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。9 行いによるものではありません。だれも誇ることはないためです。10 私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。

恵みが留めもなく流れていきます。それは、後に来る世々においても明らかにされていくものであり、永遠のものであります。ですから、後で世の終わりについて学びますが、神の恵みは初めから終わりまで貫いているものです。そして、救いというのは恵みによります、人が誇るようなものはありません。自分の行なった良い行ないでさえ、それは神が予め備えてくださったものであり、神の恵みがそこに満ち満ちているのです。

ところで、私が衝撃を受けた、カルバリーチャペル・コスタメサでのメッセージがありました。チャックが説教壇からこう言った時です。「神にとって私が大切であるのと同じように、あなたは神にとって大切なのです。」これまで私は、チャック・スミスという人物にはイエス様は近くにいる、私はずっと後ろの末席にいて、イエス様からの祝福のおこぼれにあずかっていると思っていました。チャックはイエス様に近いけれども、私はそんなに近くないと思っていたのです。しかし、彼は自分にイエス様が近いように、イエス様はあなたにとって近いのだ、と言ったのです。これは衝撃でした。チャックの語るイエス様は、彼にとってのイエス様だと思っていた方が、なんと私にこんなに近くにおられ、愛しておられ、この方の愛を、ずうずうしくもどんどん受け取ってよいのだと知りました。

なぜ日本のカルバリーチャペルでは、牧師を「先生」と呼ばないのか理由があります。それは、それぞれがイエス様にとって愛されている存在であることを知ることです。そこに、十二使徒の中で最後まで生き残った最長老であるヨハネは、彼こそが大先生と呼ばれるべき人であったのが、黙示録でこう言ったのです、「私ヨハネは、あなたがたの兄弟であり、あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐とにあずかっている者(1:9)」であるとのことです。イエス様の最も近いところにいたヨハネが、自分を介入せずにそのまま御父と御子の交わりの中に入ってほしいと願っていました。

私たちはみな、行いによらず、ただ恵みによって救われたものです。この前の五月のカンファレンスの時に、府中のリッチと、鎌倉のジャックと祈る時がありました。ジャックが言いました。「リッチは、いろいろ悪さをして、捕まるようなこともやって、それで救われたんだよな。清正は鬱になって、その惨めな時に救われたんだよな。私も曰くつきだし。恵みによって救われた者たちが集まって、交わっているんだな。」だれも偉くありません。恵みには、自分が徹底的に死んでいないといけません。ただ、神によって救われた恵みの中にあるのだということを忘れない交わりを保ってほしいと願います。